

秋田にほんごの会通信

私にとっての「多文化」

秋葉 丈志



父の仕事のためにアメリカで生まれた自分は、幼稚園時代一旦日本に戻った後、再び父の赴任でアメリカに渡った。アメリカの首都・ワシントンDCの近郊、メリーランド州の小さな町で現地校に通い始めた。いまとなっては、この小学校が今の自分を作ったと思う。

小学校3年生のときだったと思う。学年全体で日本について学ぶことになった。当時この学校は生徒のほとんどが白人で、自宅の近所で初めて他の人の話す日本語が聞こえてきただけで、「日本人がいるよ！」と親に報告する環境だった。そんななか、学年全体が日本について学ぶことになり、その取り組みは各教科に渡った。社会の授業では親が日本大使館から借りてきてくれた日本紹介の映画を見た後、私が「解説」のプレゼンテーションをした。工作の授業では一人一人が「ペーパー着物」を作ってみんなで着て喜んだ。十数年後再会したそ

の小学校の友人が、突然そのペーパー着物を引っ張り出してきたのには驚いた。まだとってあったのだ。音楽の授業では全校合唱祭で日本の童謡「証城寺の狸囃子」を歌うことになり、自分が日本語コーチをすることになった。合唱祭でそれを歌い終わると、見に来ていた親たちに向かって音楽の先生が「タケシがこの歌を教えてくれた」と紹介してくれた。



通った現地校の文化祭の様子。ウェルカムのパスターにも様々な人種が描かれている。

この小学校を去る日の朝、突然全校放送が流れ、校長先生が「タケシの帰国はアメリカにとっての loss、日本にとっての gain」と言ってくれた。それを聞いたクラス中から拍手が起こった。一生、自分の脳裏を離れない場面である。そんなわけで、自分はアメリカの現地校に通いながら、日本語や日本文化を大事にさせられて育ったのだ。

小学校6年になる直前に日本に「帰国」



小学校時代を過ごしたメリーランド近くの池

した。それまでの記憶にある大半をアメリカで過ごしていたから、自分にとっては新しい国に来るようなものだったと思う。帰国前は「いじめ」が怖かったし、当時は帰国したいとは思っていなかった。父のアメリカ勤務が延長になるたびに、「イエーイ、イエーイ」と走り回って喜んでた。

帰国した先は埼玉の片田舎の町だった。しかしここでも、帰国子女としていじめられるどころか、アメリカの小学校で与えられた役回りを続けることになった。今度は日本をアメリカに紹介するのではなく、英語圏を日本に紹介する形で。

時々、帰国子女が、いじめられるのを恐れて、わざと流暢な英語を話さず、たどたどしい英語を真似るとい話を聞く。でも私は、英語の授業となると「じゃここは秋葉君に読んでもらいましょう」と言われて、教科書を読むとクラスみんなが拍手する、ということの繰り返しだった。学校に外国からの訪問団があると一日授業を「免除」されて通訳として同行し、町に外国からの訪問団があると町役場から電話がかかってきてやはり同行した。少年野球の国際親善試合などでは一週間付きっきりで、開会式

からゲーム中から夜のコーチ同士の付き合いまで付き添った。そして段々と意識的に、英語とかアメリカとの関わりを自分で生かしていく気持ちが出てきたと思う。それが日本でできたのは、メリーランドの小学校が日本の自分を、埼玉の小学校がアメリカの自分を、生かすように、伸ばすようにしてくれたからだ。

その後、自分はメリーランドと埼玉で経験したことを繰り返すことになる。大学院でカリフォルニアに留学し、6年間を過ごした。そのときは日本を研究対象にするアメリカ人の先生のアシスタントとして、日米シンポジウムなどの場には必ず呼ばれ、双方の国の橋渡しに携わることになった。そして、博士候補の資格を取得して行動が自由になったと思った矢先に、秋田の国際教養大学で教員の公募がかかったのだ。

その内容は、日本の学生に、アメリカについて、英語で教えるというもの。自分史とこれほどまでに重なり合う条件の仕事は初めてだった。運命を感じた。日本人として、日本にいながら、国際性を志向し、外国留学と国際的キャリアを夢見る学生たちとの相性は抜群で、日々ひと足が絶えない。

日本とアメリカには戦争の歴史もあるし、かつての日系人は日本的なものを否定され、第二次世界大戦中は強制収容所に入れられ、二世・三世に日本語や日本文化はあまり語り継がれなかった。しかし自分は、アメリカに生まれ、幼少期をアメリカで過ごし、そこで日本文化を持ったアメリカの一員として育まれた。その後日本に帰国し、今度はアメリカの文化を持った日本人として育まれた。そして、いまそのどちらにも無理のないすべての自分を生かせる仕事に就い

ている。その過程には、両親、身近な教員、地域の人たちから自分を生かそうという意向、働きかけがあったと思うし、その前提条件として国の政策や社会全体の風潮も反映していただろうと思う。

人が自分を何者であると考え、どういう方向に伸びていくかに大きな影響を与える

のが教育環境、社会環境なのだと思う。私が生かされたように、たくさんの人を生かしてあげたい。それが自分史を生かした自分なりの「多文化教育」への取り組みだと思う。

(あきば たけし

国際教養大学講師[常勤] 本会会員]



<教室探訪>

おじゃまします、こんにちは

教室にお邪魔したのは8月21日。会場の本荘公民館は文化会館と同じ敷地内の建物です。教室はその4部屋を使い、6クラスが開講されています(ただし訪問時は3部屋で5クラス)。部屋割りとレベルは以下の通り。初級前半が2レベルで同室、初級中盤も二つで同室。ほかに初中級レベルが一つあり、これは単独で部屋を使用。教室で学んでいるのは主に配偶者と県立大学の研究生で、学習者のほとんどがアジア系です。



明るくなごやかな授業風景

教室を見学してすぐ気付いたのは次の2点でした。教材が1課毎に大きな茶封筒にまとめて整備されていることと、サイズの大きいクラスで横長のテーブルがコの字に

ー 由利本荘市日本語教室の巻

配置され、学習者が互いの顔を見て声を聞きながら学べるようになっていたことです。以下では当日の指導内容などについて触れます。なお、初級の主教材は『みんなの日本語』、初中級は『新日本語の中級』です。

- ・ 初級前半 7課を学習しているクラス(以下、7課)と10課のクラス(以下、10課)がありました。どちらも学習者はゼロ初級。7課には小学生の子どもと留学生が参加しています。退屈させないようにという配慮なのか、留学生が時々子どもに話しかける姿が見られました。

10課の方は1対1での学習。教師の細かな板書が学習者の理解を助けていました。

- ・ 初級中盤 17課では動詞の「ない形」と「～なければならぬ」を指導者が時間をかけて説明し、授業が展開しました。説明および練習には手作りのペープサートや絵カードを使用。ペープサートは表と裏で人物の表情が異なるなど、内容説明に合わせて作られています。4人の学習者は分からな

いところをお互いに助け合ったり、指導者に質問したりしながら学んでいました。

30課では復習に続き、「～である」と「意向形」を学習。学習者が発表する例文に対して教師がコメント、それを聞いて学習者が反応するなど、始終日本語によるやりとりが絶えませんでした。そのやりとりは配偶者と研究生の間でも活発で、17課のクラス同様、分からないところを学習者同士で教え合う姿も見られました。



真剣です

・初中級 学習者の多くが研究生で占められているこのクラスでは、言語技能別に力をつけるべく複数の教材が用いられていました。2時間の授業時間の前半部分は読解練習と聴解練習、休憩後は『新日本語の中級』の学習です。その日の読解練習は、選択肢から正しい要旨を選ぶものでした。聴解練習はパズル問題で、学習者が苦労しながら取り組んでいる姿が見られました。後半は『新日本語の中級』7課に載っている問診票を見ながら、それに基づいた会話を聞き、その問診票の空欄部分を埋める練習が中心でした。この初中級クラスには、学習者と机を並べる指導者が一人いて、ついて行くのが大変そうな人にヒントを与えたり、一緒に問題を解いたり、問題の感想を述べたりしています。あとで聞いたところでは、

授業に参加しながら初中級の指導法を学んでいるのだそうです。

全体の感想として、どのクラスも明るくなごやかだったことが印象に残りました。「意向形」を学習したクラスで帰り際に交わされた会話がその雰囲気をよく表していると思うのでご紹介します。

指導者「じゃあ、今日の授業を終わります...終わろう(学習したばかりの意向形)」

学習者A「(即座に)帰ろう」

学習者B「(オトから冗談で)...ごころう、アハハ」

最後になりましたが、指導で忙しい中、丁寧に対応してくださった藤嶋英子先生、快く見学させてくださった指導者の先生方及び学習者の皆さんにお礼を申し上げます。

(リポーター:佐藤 雅彦)

由利本荘市日本語教室

開催時間 4月～12月の毎週金曜日、午後6:45～8:45(2時間、途中で休憩あり)

代表 藤嶋英子さん

受講生 現在は42名登録。国際結婚の配偶者とその連れ子、県立大の留学生、研究生など。

学習目的 車の免許取得、仕事、子どもの成長などにつれて増す必要性への対応。そのほか、同国人とコミュニケーションをとるためなど。

指導者 6名。うち秋田にほんごの会会員は藤嶋英子さん

その他 指導者会議を年4回実施。行事としては開講・閉講式、日帰り旅行など。この教室の他、かなと漢字の学習も同会場で日中行われている。

会員の皆さんに聞きました



これからもどうぞよろしく

鮎沢 孝子

「秋田にほんごの会」に入会した動機、それは宮本律子先生とは、秋田に来る前からの知り合いだったからと言えます。秋田に来るまで東京外国語大学勤務だったのですが、宮本先生は東京外大のアジア・アフリカ研究所にときどきおいでになっていたそうで、ある日、宮本先生と私の共通の友人である新羅大学の先生が宮本先生を私の研究室に案内して来てくれたのです。そのときは、まだ、自分が秋田に来ることになるとは思ってもいませんでした。

2004年4月に国際教養大学が開学、05年9月の『秋田にほんごの会通信 No.38』に本学

の日本語プログラムを紹介させていただきましたが、現在は状況がだいぶ変化しています。

当時、日本語教員は常勤4名、非常勤1名、計5名でしたが、09年9月には常勤7名、非常勤5名、計12名。日本語学習者は05年9月は36名、09年9月は136名です。

そして、08年9月に専門職大学院が設置され、日本語教育実践領域は1期生5名を迎え、09年9月には2期生5名を迎えました。この日本語教員養成プログラムを通して、この会の皆さんとの交流をさらに深めていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

「日本語教育は幅も広く、奥も深い」

佐野 ひろみ

秋田へ移ってはや2年。首都圏から見ていると秋田は遠い。移り住むまでは、秋田がこんなに美しく、温泉が豊富で、お酒も食べ物も美味しい県だとは知らなかった。まるで私にとっては天国のような所だ。その上、35年も日本語教育に携わりながら、県内にこんなに多くの所で日本語教育が実施されていることさえ理解していなかった。秋田市をはじめ、横手、湯沢、能代等、ほとんどの地域で教室が開催されているのを知って驚き、自分の不

勉強を反省した。そこで少しでも秋田の日本語教育事情を知りたいと思い、「秋田にほんごの会」に入会させていただいた。

35年間に本当に様々な国と地域、文化圏の学習者たち、様々な職業と職種の学習者たち、大学院や大学の留学生と、数知れない出会いと教育現場を経験したが、まだまだ知らない領域があり、出会ったことのない教育現場があるのでないかと思っている。日本語教育は幅も広く、奥も深い。

みんなの心が一つに

小原 恵美子

湯沢市日本語教室では8月の「七夕絵どうろうまつり」に参加しました。生徒さん一人一人が、五色の短冊に、真剣なまなざしで思いを込めて「にほんご」で書きました。そして、短冊や吹き流しなどで華やかになった笹竹は、湯沢市の目抜き通りにある市民プラザ前に飾られました。



短冊に目を通してみると、「にほんごがじょうずになれるように。」「子どもが元気に育ってくれますように。」「姑さんが長生きしてくれまように。」等々。

皆さんの願い事は国境のない天空に届き、お星様もきっと輝き、うなずいてくれることでしょう。

心が温かくなる素敵な七夕の夜でした。

「にほんごの会」に求めること

伊藤 美樹子

にほんごの会の方々がやっている日本語教室の情報が、もっと具体的にわかるようになったら良いと思います。たとえば、会のホームページに教室一覧を載せるなどです。そうすることにより、日本語について困っている人やその身内の方などが、参加できる教室を調べたり、参加する前に相談したりしやすくなるのではないのでしょうか。そこに、教室の地図、開催時間、活動の様子がわかるような写真などを載せてみてほしいかと思えます。また、相談などを受けつける連絡先や相

談可能な時間帯などがあると、学習者だけでなく、その周りの人の助けになるのではないのでしょうか。

他には、会員同士で、教室内で困っていることや、使用テキスト、教え方などの情報交換ができるインターネット上の掲示板があると便利だと思えます。会員が実際に集まって情報交換できればよいのですが、そのような機会を設けるのは難しいことですので、インターネットを活用して行えるようにしていただきたいと思います。



* 活動報告 *

総会 4月18日
運営委員会 4月7日 7月25日
学習会

4月18日
「地域社会が生き生きとする日本語教育支援
に向けて - 移民受け入れ前夜にあたり - 」
講師: 春原憲一郎氏
(< 財 > 海外技術者研修協会理事)
6月27日
「意味論 語彙と文それぞれに注目して
その1」
講師: 佐藤稔氏
秋田大学教育文化学部教授
7月25日 「同上 その2」
8月29日 「同上 その3」
9月19日 「同上 その4」

* 活動予定 *

運営委員会 2ヶ月に1回
学習会

10月17日
「言語教育をめぐるアメリカ社会の論争」
講師: 秋葉丈志氏
(国際教養大学講師)
11月7日
「メディアリテラシーと情報教育」
講師: 山崎博樹氏
(秋田県立図書館 企画・広報主任専門員)

< 編集後記 >

国際教養大から多数の新入会員を迎え、由利本荘教室の活気ある報告に接し、本会は今年も実り豊かな秋となりました。それぞれの地域での会員のいっそうのご活躍をお祈りいたします。

(J.T)

